

白兔と脱兔

「週末寸言」原稿 20090905

『古事記』に出てくる「稻羽之素菟」こと「因幡の白兔」といえば、誰でも知っている。いたずら者のウサギのことだ。このウサギ、淤岐嶋（現鳥取県）へ渡りたいのだが海を泳ぐことができない。そこで一計を案じた。そこらの海を泳ぎまわっているひまな和邇（ワニザメのことらしい）どもを利用することだ。

「お前たちと俺の仲間とどちらが数が多いかくらべっこをしよう。俺がお前たちの仲間の数を数えてあげるから気多の岬まで並んでみる」。気の良い和邇は言われるままに向こう岸まで並んだ。ウサギは彼らの頭数を数えながら岬までやってきた。計略成功を確信したウサギは、上陸まであと一歩というところで、たくらみを暴露した。これが運のつき。捕まえられて丸裸にされてしまった。まさに天網恢恢、疎而不失だ。

筆者のところには全国の大など高等教育機関の現場情報が連日洪水のように寄せら

れてくる。ガマの穂綿で傷の癒えたような美しい話も無いではないが、その記事の多くは不祥事だ。中でも、アカハラ、パワハラ、セクハラなどという一連の「ハラスメント」情報で溢れ返っている。横文字を使うので何かハイカラなことでもやっているように見えるが、ハラスメントとは悪質な「いじめ」のことだ。何でこんなにいじめが流行るのか。それも良い歳の、功成名を遂げた立派な「先生」がやっている。あんなに偉い人がどうしてとも思うが、何のことは無い、彼らは和邇を騙して海を渡ってきた。「因幡の白兔」なのだ。人生の実りの秋になつて悪事が露見してしまい皮をむかれて赤裸になつたということらしいのだ。こういうハラズメント「ウサギ」には、ガマの穂綿で身を包む前に、海の潮をたっぷりすり込んで、天日にかざし己の愚行を痛感させないといけない。それにしても、この数の多さから邪推するに、天網にかからずに退職金をもらってまんまと向こう岸に渡ってしまった「脱兔」も少なからずいるはずだ。もしそうなら和邇にはもつともつと目を光らせてもらわないと困る。